



セレモニー後、イチゴ狩りを
楽しむ大阪成蹊大学の学生た
ち＝三田市末

イチゴ狩りの季節到来を発信

三田市内のイチゴ狩り園の今季本格オープンを広く発信する「さんだいちごセレモニー」が、同市末の「稲鍵ファーム」で開かれた。生産者やＪＡ兵庫六甲、市観光協会の関係者らが集まり、観光客の誘致へ向けて市産イチゴの魅力を伝えた。

ＪＡによると、市内には７カ所の観光イチゴ狩り園があり、紅ほっぺや章姫、かおり野など多彩な品種をハウス栽培する。生産者らは、「三田いちご」の名称で市内外に売り出している。15日のセレモニーでは、

関係者セレモニー 訪日客誘致策も検討

市観光協会の見野裕重会長が「三田のイチゴは新春を告げる風物詩。魅力をアピールし、観光誘致につなげたい」とあいさつした。

市内では新型コロナウイルス禍以降、イチゴ狩りのバスツアー客が減少。農園主たちでつくる「三田観光いちごゲループ」は客層をインバウンド（訪日客）に広げようと、昨年から大阪成蹊大（大阪市）国際観光学部と連携し、誘致策の検討に取り組む。

この日は同大の学生5人も参加。イチゴ狩りと、市産もち米「ヤマフクモチ」

を使ったいちご大福作り体験を組み合わせた観光プログラムを提案した。

式典後には、「あすカルビー」を栽培するハウスで、参加者らがイチゴ狩りを楽しんだ。同大2年の東野竜也さん（20）は「ハウス内はイチゴの香りが漂っていて、五感で楽しめる。スイパーで買うイチゴより甘くておいしい」と話した。

同グループの稲岡英明代表（47）は「冬場の寒暖差が激しい三田は、おいしいイチゴを作るのに適している。ぜひ食べに来てほしい」とＰＲした。（谷川直生）